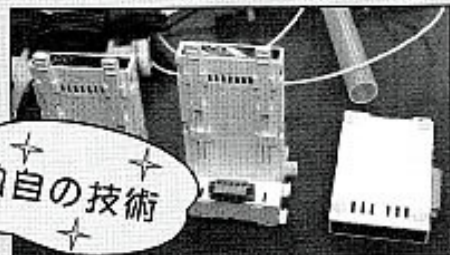


戦略と戦術



不可能を可能にする

知恵を絞ってコストを下げるのがものづくりの醍醐味の一つ

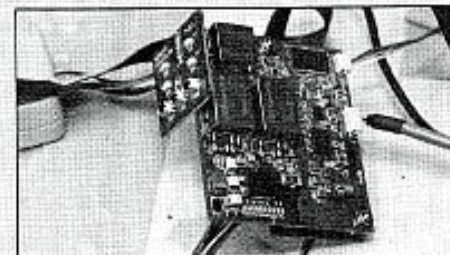


独自の技術

半導体業界のほか、医療分野、バイオケミカル分野への進出も



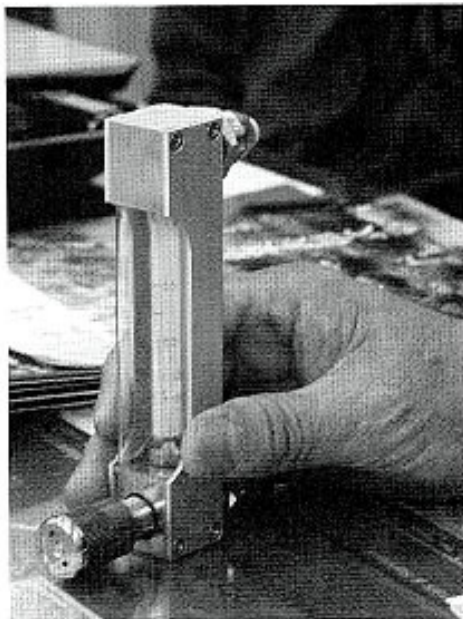
最新技術開発のニュース、世界経済状況からも市場の動向を読む



信頼内容を正確に把握することで、製品Qのスピードに差が出る

日々、技術の向上に努める

●事業/超音波を使用した流量計、レベルメータの開発、製造 ●代表者/村上英一 ●所在地/葛飾区立石6-7-10 ●年商/0億2500万円 ●従業員16名(内非正規従業員5名) ●電話03-5698-8884 ●http://atsuden.com



試作を重ねて製品化に成功した面積流量計。現在は電気で製作



「(株)ATSUKI」で製造の指導にあたる先山さん(左)とは阿部の呼称

「こんなもの、どこかの町工場に持って行けばうちにならなくて済むよって言う人もいる。でも、完成までには、もの凄く苦労があったんです」

液体用ガラス管を最初はガスで作っていた。温度を高くすると、ガラスが溶ける。それを真鍮で引張り出す。すると、ぎゅーっと縮む。その加減を計算して、ガラス管を成形する。すべて高度な技術に支えられたガラス職人による手作業である。職人の体調次第ではその仕上がりが具合にはらつきがあった。しかも、一人前になるには、勤のいい人でも8年はかかるというのだ。ガスの作業は熱く、ススで真っ黒になるから若い人は敬遠する。

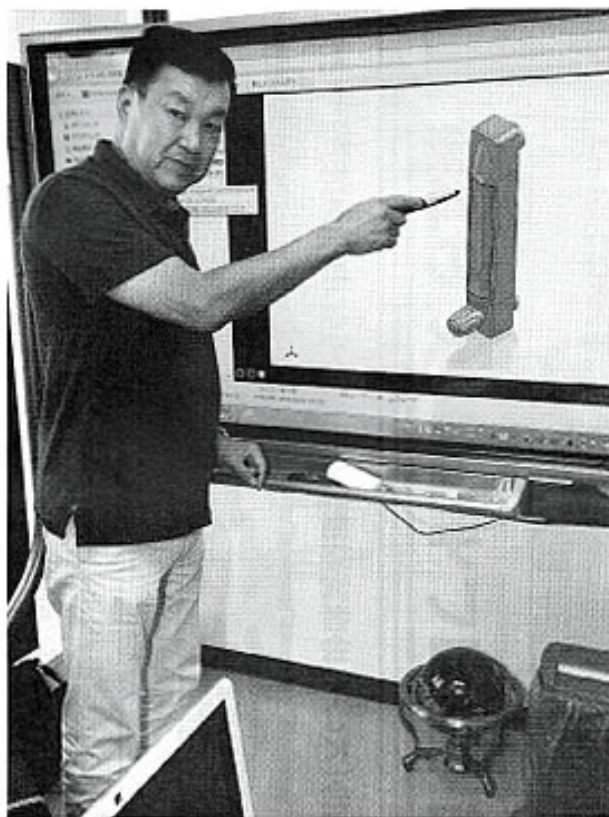
流量計で世界シェアの3割を占める

平成25年
最優秀賞
しんきんものづくり大賞
優良企業表彰式

ものづくりゆめづくり

株式会社アツデン

流量計の分野で開発・製造の連携により
グローバルリーディングカンパニーを目指す



村 上英一社長(62歳)は、優れた傾聴力を持つている。思に飛び交うたくさんの情報のなかから、自らに必要なものを正確にキヤッチして、それをビジネスに生かしてきた。

中学時代のことだ。

「日本は資源が少ない。資源を輸入して知恵を使ってもものを作り、付加価値をつけて海外に輸出することが大事だ」と授業で教わった。

先輩からも「村上くん、ものづくりというものはお金を生むよ」と言われた。村上社長はその言葉に導かれるようにして、ものづくりの世界に入っていく。

現在、株式会社アツデンは流量計で世界シェアの3割を占める。ものづくりの世界が持つ可能性を信じて、来る日も来る日も挑戦し続けた努力の成果だ。気がつくくと、同社の独自の技術は世界マーケットの真ん中に躍り出ている。

「1分間に流れる微量の液体をどれだけ正確に測れるかということになると、世界的な技術水準から考えても至難の業です。1分間に15ccというのは、ほとんど流れているかわからないくらいに微量です。だから我々はそれを測るための流量計の開発を手がけてきました」

洗浄液や薬液などの微小な流量を正確に測定できる流量計誕生には、ものづくりにかけた人たちの心意気があった。

出来上がったものを見れば、シンプルだが、実はそんなに簡単なものではないのだ。

村上英一(むらかみ えいいち)社長 昭和26年6月、千葉県野田市生まれ。大学卒業後、マクドナルドを経て、平成7年、同社を創設。「グローバルニッチな市場でオンリーワン、ナンバーワン」を目指して、ものづくりの醍醐味を味わう。平成22年には仲間をうまき市に子会社「(株)ATSUKI」を設立し、生産体制を強化。趣味は年に船に釣り。船釣免許も持つ格闘家



一人でいくつもの仕事をこなす。同社に就職するまでは未経験だった設計支援ツールを、いつのまにか3分の2の社員が習得した

ケーブルのハンダ付けは慣気のある作業だ。静かな作業室で一糸一塵丁寧に整えられていくケーブルの束さ美しく見えてくる



電気炉による回路実装設計の開発に挑戦して3年。不可能を可能にした企画・制作の先山さん

ハローワークから就職した社員が多い。いろいろな経歴を持つが、縁あって同社に入り「水を得た魚」になった。平均年齢35歳から40歳の層が盛りだ



1階にはクリーンルームがあり、製品の最終チェックが行われる。ここで誕生する製品がいかにデリケートなものであるかが、張り詰めた空気とともに伝わってくる。時代が変わっても「ものづくり」の現場には、昔ながらの職人気質が健在

「製造業こそが日本の生きる道」と言い切る村上社長の背中が、大きく広く、そしてあたたかい。

「社員の協力なくして会社の発展はありません。社員が自分の誇りです。いつも彼らの幸せを考えると、それが僕の役目だと思っています」

しんきんさんへのメッセージ / 「昔の話になりますが、千形を創る時に、責任状とか必要だと書かれて困っていたら、しんきんさんが「うちで困ってあげよう」と書いてくれました。その時の涙があるから、今でもしんきんさんっていいなと思っていますね」

「のままだと将来はどうなるのか、と...」
「ガスから電気になり替えてみたらどうだろう、とひらめいた。そこから同社のさらなる挑戦が始まったのだ。」
「中の安全(しんがね)の温度が何度で、ガラスが何度になった時にうまくいくところまでではなかった。ただ、数字ではわかっていても、そこから先が見えてこなかったんですね」
「終わりの見えない村上社長の提案を受け入れ、黙々と形にし続けたのが、先山浩平さん(38歳)だ。」
「結局、開発には3年かかった。この間、先山さんも諦めなかったが村上社長も諦めなかった。ある日、先山さんから相談された。」
「電気炉の設計で1200度まで耐えられるものを作りたい。溶けるかもしれないけれど、やってみよう」
「また、失敗に終わるかもしれない。かかる費用も半端ではない。しかし、「やってみればどうだ」と答えていた。ダメなら、またチャレンジすればいいんだか?」
「挑戦しないことには、結論は出ませんからね」
「トライし続けることが、ものづくりの原点なのだ。そして、このチャレンジは見事に成功。コンピュータ管理による電気炉への移行が、ガスの安定供給を可能にしたのである。」